「放射性廃棄物地層処分シンポジウム　2006　in 九州」
第二部パネルディスカッション

司会）　ご来場の皆様にご案内申し上げます。まもなく第二部パネルディスカッションを開始いたします。お手持ちの携帯電話は電源をお切りになるか、マナーモードに設定していただきますよう、ご協力をお願い申し上げます。

皆様大変お待たせいたしました。ではただ今より「放射性廃棄物地層処分シンポジウム2006　in 九州」第二部パネルディスカッションを始めてまいります。それでは第二部のパネルディスカッションにご参加いただきます皆様をここでご紹介したいと思います。まずはステージ上にご登壇をお願いいたします。

それではここでステージ上にお越しいただきました皆様をご紹介いたします。まずはパネリストのご紹介です。第一部から引き続き、経済産業省資源エネルギー庁放射性廃棄物等対策室長の吉野恭司さんです。続きまして大野城まどかぴあ男女平等推進センター所長の林田スマさんです。続きまして消費生活アドバイザーの野口博子さんです。続きまして社団法人日本青年会議所九州地区協議会副会長の有松一郎さんです。第一部から引き続きの出演になります九州大学大学院工学研究院教授の出光一哉さんです。同じく第一部から引き続き独立行政法人日本原子力研究開発機構地層処分研究開発部門研究主席の梅木博之さんです。同じく第一部から引き続き原子力発電環境整備機構理事の清野貫男さんです。そして本日コーディネーターを務めますのは、西日本新聞社論説委員会副委員長の溝越明です。以上の皆さんですすめていきたいと思います。そしてここからの進行はコーディネーターの溝越さんにお願いしたいと思います。溝越さん、よろしくお願いいたします。

溝越）　はい。皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました西日本新聞社の溝越です。第一部では高レベル放射性廃棄物の地層処分とはどういうことか。地層処分の安全性などについて全般的な概要説明がありました。放射性廃棄物の地層処分というと、何かものすごく難しいような感じがしますけれども、要するに原子力発電所でウランなどの核燃料を燃やした時に出てくるゴミを、どうやって地下に安全に埋めるかということだろうと思います。

第二部のパネルディスカッションではこの地層処分の安全性や処分地の選定に向けての課題などについて、パネリストの皆様からのご意見やご質問、さらにご来場の皆様から事前にいただいていた質問などをもとに、議論を進めていきたいと思います。

そこで第一部の地層処分の安全性という事で、かなり詳しい説明がありましたけれども、まだ分からない点もあると思います。そこでまず地元のパネリストの方たちにいろいろな質問などをまずしていただきたいなと思っております。トップバッターとして大野城まどかぴあ男女平等推進センターの所長でフリーアナウンサーとしてもご活躍の林田さんにお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

林田）　はい、よろしくお願いいたします。私は女性の視点、そして生活者の視点をもって話をさせて頂きます。非常に深い勉強を前のほうの席でさせていただきました。地層処分が何故必要なのかということ、安全であるということ、それから研究開発が進められているということもすごくよく分かりました。フィンランドの例も見ながら、その立地、地域との共生、そして最後にはその地域の未来像まで出てきて、処分地にモニュメントが建つんだというお話がありましたが、日本でもそういうふうにうまくいくのだろうかと思いました。

私たちはこの原子力発電の中から出てくるゴミに対する認識がすごく薄いわけです。一人称二人称三人称という言い方をしますと、我が家のゴミというのは、自分のゴミ、家族のゴミというのは一人称二人称のゴミで、すごくよく見えますし、これくらい出しているんだという認識があるんですが、原発のゴミというのは三人称でどこか遠いところで、溜まっているのは分かる、しなければいけないのはすごくよく分かる。だけどそれは私のところはイヤ、お宅でやって頂戴、安全大丈夫だからと。こういう認識がまだまだ私たちの心の中に息づいているんじゃないかと思うんですね。

ですから、本当に安全なのかというところが問題なのです。先ほどお話をずっと伺いながら、幾つかの図を拝見しておりました。例えばこのテーマ２のところの（皆様方お持ちだと思うんですが、）図 10 の予測評価例、地下水がどのくらい安全か、そしてずっと先になるとひょっとすると？みたいな数字があったりするわけですね。安全性というのはどのくらい守られていくのかということがやはり解りにくいと思いました。今日参加なさった方々の事前のアンケートも拝見したんですが、質問票もありましたが、殆どの皆様方の声の中に、本当に安全なのかどうなのかというものが多かったです。その辺のところをもっともっとわかりやすく説いていただくという事をこれからして頂きたいものです。1976 年に地層処分が決まったと伺うんですが、四半世紀以上経ってもまだまだ進んでいない気がします。私たちの耳に入ってきたのはまだ何年か前です。そういう意味で必要性と安全性というものを、もっと分かりやすく、私どもに説いていただきたいなと考えながら話を伺いました。また後ほどたくさん具体的な質問をさせていただきたいと思っております。

溝越）　はい。続いて消費生活アドバイザーとしてご活躍の野口さんに、消費者の立場からご意見をお願いしたいと思います。

野口）　はい、こんにちは、野口です。よろしくお願いいたします。私は先ほどのお話だとかビデオを見て、地層処分システムはもう安全だよ、安全性は確立されているよという感じのお話だったんですけれども、なんであれ安全というのは絶対に必要だと思うんですけれども、私たちが日頃の生活のなかで毎日のように使っている電気製品だとか、ガス器具だとか、他のもろもろの製品でも、一番最初買ったときには使用上の取扱説明書を見てきちんと使おうと思うんですけれども、段々慣れてくると適当に使ったりだとか、あとは慣れているから、ちょっとおかしくても平気で使ったりという事をやってしまう事が多々あるのではないかと思います。

実際にいろいろな製品の事故が起こったときに、調べたところ、設計上のミスがあったよというものもあるようですけれども、多いのは不注意だとか誤使用だというところが多かったりするんですね。ですから、ちゃんと安全性は確保されてますよといわれても、やっぱり人間が何かすることというのは、過ちというか、エラーが起こることだなと思いますので、そういう意味では、本当にいろいろ今出てきた中で、例えばガラス固化体にするときに、本当に安全にできるのかというところでは、理論上はできても人間がやるところで万が一ミスがあるのではないかなとか、あったときには何か対処する方法があるのかなというところをどうしても考えてしまいます。

安全ということは大前提ですけれども、過去にも様々な原子力関係の事故が起こったときに、仕組み上はこうやりましょうといっていたにも関わらず、ちょっと手抜きをしてしまったらとか、例えば原子力発電所の美浜の事故などは本体そのものではなくて、配管とかそちら側での事故だったというふうに、大元のここが一番気になるというところじゃなくて、その周辺のところでの安全性というのは本当に確保されているかなというところで、今までも何件かそういった事故が起こったときに、そのエラーが起きた仕組みだとか人間の心理などが次に生かされるかどうか、そういう取り組みがなされているかどうかなというところが、私の気になる点です。まず第一に以上です。

溝越）　はい、分かりました。ありがとうございました。続いて大分から来られている日本青年会議所九州地区協議会副会長の有松さんにお願いしたいと思います。

有松）　はい、改めまして、皆さんこんにちは。青年会議所の有松と申します。青年会議所は 20 歳から 40 歳までの青年経済人の集まりでございまして、今全国で 4 万人、世界中に 27 万人の会員がいる団体でございます。要は明るく豊かな社会をつくろうよという事で、企業家、青年経済人が手弁当でやっている団体なんですけれども、かくいう私も実は本業はタクシー会社の経営をやっております。

実はタクシー会社も最近エネルギーという事では、燃料にガスを使っているんですが、大変な高騰に見舞われておりまして、非常に苦しんでおります。実は家庭の中でも電気ですとか、そういったエネルギー消費というのがあって、これもある程度値ごろ感といいますか、今の生活水準を維持していくのには今のシステムというのが非常にいいんだろうなと。そういった意味では今の原子力にある程度頼っていかないと、今の日本の状態では、エネルギー状況では非常に厳しいんだろうなというような、何となく納得はしているような感じがしております。例えばこれはお金の問題だけじゃなくて、環境面のコスト等も考えますと、他にいろんな発電の方法というのはあるんでしょうけども、水力であったとしても山を潰さなきゃいけなかったり、ともすれば故郷を奪われる人がいたり、火力であればたくさんの CO2 を排出していくという事が先ほどの説明の中でもよくよく分かりました。

そういった意味では比較的クリーンなエネルギーの原子力とどう付き合っていくのかということは、やっぱり原子力というものは考えていかなきゃならないんだろうなというのは分かります。しかしながら、そうはいってもなかなか付き合っていくのが難しい。例え

ばこういった廃棄物の問題等が出てくると、こういう議論が必ず起こってくる。そして冒頭今挙げましたけど、うちのところは困るけど他所ならいいよという事が起こってしまうというのは実際なんだろうなと。今日のこの会議に参加しながらそんな事も考えておりますが、この核燃料、いわゆる原子力というものと、私たちはいったい今後どのくらい付き合っていかないといけないんだろうなというのが、実は今の時点ですごく不安になっております。

いろんな新しい代替燃料について週刊誌やマスコミ等を通じて私たち耳にする事はあるんですが、まだ恐らくはっきりしたことはなかなか得がたいところがあって、しかしながらこのまま未来永劫この原子力と付き合っていかなければいけないというのであれば、我々も考え方を変えていかなければいけないのでしょうが、もし今その目処が立つのなら、そこまで我々は何らかの形で核燃料サイクルというものに対して本気で取り組んでいかないといけないのかなという気がしております。そういった意味では本当にこの原子力といつまで付き合っていくのかということについては、何らかの答えがあると私たちも少し安心できるのかなという気がするのと、それから概ね安全なんだろうなと。

今のお話と一緒なんですけど、概ねこの地層処分ということ、これは正しいというか確かなやり方の一つなんだろうなというのは分かりましたが、しかし相手は地層という、いわば人知を超えた自然というものが最終的に相手になっているというところでも、この長いスパンの事業のなかで、本当にずっとこれが安全であり続けるのだろうかという事については、まだまだ実感がないというのが正直なところです。特に私は本業はタクシー会社の経営でございますし、今までこういった問題について一生懸命考えたということも特にありませんし、そういった意味ではできるだけ物差しを持たない私たち素人にとっては、多くの専門家といわれる方もしくは研究者の方、そういった方からできるだけ多く大丈夫だ、安心だよという言葉をいただきたいのと同時に、絶対という言葉は世の中にはないとよくいいますが、絶対大丈夫なんだよというふうに肩をたたいていただかないと、最終的にこの地層処理を受け入れる地域の方というのは、なかなかご納得いただけないんだろうなという気がいたしております。まずは冒頭そのくらいまで、ご質問もかねてお話させていただきました。

溝越）　はい、ありがとうございました。今地元のパネリストの 3 人の方から、地層処分の安全性についてのご質問がありました。まず最初の林田スマさんからあったのは、いろいろ説明を聞いていると安全だろうという話は分かるけれども、どのくらい安全なのかと。本当に安全なのかと。そのあたりをもう少し分かりやすく説明してくださいという事がございました。これについてはどなたがいいですか。出光さんよろしくお願いします。

出光）　どのくらい安全かという対比がなかなか、多分、人によってこのくらいだと安全だと思う、これは危険だと思うというのが、レベルがいろいろ違って、一概にこれですという答えはなかなか与えられないんですけれども、処分という話もありますけど、放射線に対する害というのがどのくらいかというのは、多分皆さんがあまり認識されてないと

ころもあるのかなと思うんですが、そこら辺から始めてもよろしいですか。

林田）　はい、お願いします。

出光）　そうしますと、もうご存知の方もいらっしゃるかも知れませんが、世の中放射性物質だらけで、特に原子炉があるから出ているというわけではなくて、地球ができたころから放射性物質というのは世の中にたくさんあふれています。

よく言われるのは日本人は放射能を非常に恐がる。これは世界的に割と有名な話ですが、と同時に日本人ほど放射能を好む、放射線を、被爆を好む民族もいないといわれるというか、そういう事になっているというのも事実です。多分皆さん、放射線の被曝をあえてしにいってる方がよくいらっしゃいます。例えば病院にいったときにレントゲン検査を受けますね。あれも被爆ですけども、スイスに住んでいた頃の話ですが、日本人の友達の奥さんが怪我をしたんです。検査にいってヒビが入っているかもしれないと。日本だったらまずとりあえずレントゲンを撮ってみましょうかという事になるんですが、ドイツ人のお医者さんはレントゲンを撮らないんですね。そこの人がヒビが入っているかもしれないから撮ってくださいとお願いしても、いや、治療法が変わらないから意味ないでしょうといって撮らない。無駄な被爆はしなくていいですよというんです。日本ではありえないですね。日本だったら絶対調べてほしいといって、治療法が変わろうが変わるまいが、レントゲンで写真を見せてもらうとヒビが入っているのを見て安心するわけですね。

林田）　はい。

出光）　というような事があります。あともう一つは、例えば温泉ですね。ラジウム温泉、ラドン温泉にみんな喜んで入りにいくわけです。ラジウム、ラドンというのは放射性物質なんです。こういう面をいうと恐がる方がいらっしゃるかもしれませんが、ラジウムとウランだと、同じ放射能量、同じベクレル数があると、ラジウムのほうが 60 から 70 倍危ないというふうになっています。我々が放射性物質を扱う時には、もし同じ放射能量のウランとラジウムがあった場合は、ラジウムの取扱いのほうは 70 倍くらい気をつけないといけない。そういう事になっています。また温泉に話を戻しますと、例えばウラン温泉といわれたららみんな入りに来ないですね。ラジウム温泉だとかラドン温泉というと、うちはたくさん入っていますよというとみんな喜んで入りにくるわけです。中にはこれは飲めますよとコップがおいてあって、それを飲むわけですね。同じ量の放射性物質を我々がその人に与えたとしますね。私らの手が後ろに回るんですね。放射性物質を人に飲ませたと、危害を与えたという事になって。例えそれがほんの少量で人体に影響がないような量でも、なんか飲まされたとか放射性物質だというと、非常に危ないような気になりますけれども、実際は日頃温泉などにいってかってに飲んでいて、何ともないわけです。

こういうのをいうと、温泉の方がそういうことを言うと、温泉に客がこなくなるからという話しが出たりするようですけども、じゃあ温泉の方はそんなにいっぱい病気になってバタバタ倒れていますかというと、皆さんいたって元気なんですね。かえって温泉以外の方よりも元気なくらいですから、つまり温泉にあるくらいの放射能、あるいは放射線レベ

ルというのは全然問題ないということなんです。そういうところから始まっていくんですが、話がどんどん長くなってしまうんですが、とりあえず放射線の恐さというのは濃度とかそういったものによって決まるということで、放射性物質だから危ないということではなくて、それがどのくらい危ないかというのを定量的に認識していただきたいなというふうに思います。

林田） はい。

溝越） 林田さん、今のご説明でいいですか。お分かりでしょうか。

林田） はい、また後ほどいろいろ詳しく伺いたいと思います。

溝越） それから野口さんからのご質問は、システム自体の設計ミスとかというよりも、いろんな形で不注意によるミス、人間がやることだからという事で、人間によるエラーというのが考えられるんじゃないかと。そういう意味で原子力関連の施設なんかでのヒューマンエラーがないのかどうか。特にガラス固化体などについての危険性、本当に人間がすることなのでそういうミスはないんでしょうかということだろうと思います。この点については非常に技術的な話もありますので、梅木さんよろしくお願いします。

梅木） はい。非常に重要なご指摘だと思うんですけれども、まず少し視点を変えて、何故地層処分が選ばれたのかということを振り返って考えて見ますと、さっき最初にグラフが出ましたけれども、非常に危険源として長期間続く。これを我々どう対応するかというのは、他の危険源とはある種異なる特徴なんだと思います。その時間たるや数万年とか、およそ我々の社会生活の時間軸とはかけ離れたスケールでこの物事を考えなければいけないわけです。地層処分が何故選ばれたかというと、そういった長い期間我々はヒューマンエラーを起こさずにこれを安全に処理できるのか。あるいは対応できるのかという疑問が、非常に時間軸で見ますとあるわけです。

そもそも地層を選んだという事は、仮に人間がエラーを起こしたとしても安全なシステムがないものか、逆にそういう発想だったんだと思うんです。そうすると地層を見ますと皆さんよくご存知のように、何億年も前の化石がそのまま残っていたりとか、非常に安定です。地質学者の人はよく 100 万年オーダーの話とか、億年オーダーの話を平気でするわけですね。私も地質学じゃないんで、そういう話を聞くと、殆ど自分の考えの外のような気がするんですけども、そういった非常に長い時間安定なものであるということは、何となく私にも分かりまして、こういったものにもし仮に人間がエラーを起こしたとしても、安全なようなシステムを委ねる事ができないか、そういうところからまず発想が起こったんだと思います。

ですからまず地層を選んだのは、そもそもヒューマンエラー対策ではなかったかというふうな解釈も私はできるんではないかと思います。ですが実際はその安定な地層に処分場を穴を掘って建設しまして、そこに先ほどご指摘のあったガラス固化体のような人工物を持っていきます。ですからこの人工物をどういうふうに作るかというところに、まずヒューマンエラーが入ってくる可能性がある。地下に埋設するときにもあらかじめ決められた

ルールできちんとやるはずですけれども、ひょっとすると間違いが起こるかもしれない。そういった事は一々チェックしないといけないですね。それをチェックするためには、通常の工業生産でも行われておりますような品質管理という手法が非常に有効で、世の中にある商品を出すためには、きちんと品質管理されて、一万個物を作ったら、一個あるかないかくらいまで品質管理を整えるわけですね。

原子力の世界は特にこの品質管理が厳しくて、ガラス固化体のようなもの、これは例えば商品ではありませんので 1 万個も 2 万個も 100 万個も作るというようなものではないんですけれども、品質管理というのは極めて厳しく行っています。そういったことを適用すれば相当な確度で失敗例を減らす事ができる。ガラス固化体は見てお分かりのように、何もしなければじっとそこにいるわけですね。人間が近づかなければ安全だということであれば、余り人間とのインタラクションはそもそもないわけで、その後はヒューマンエラーが起こる可能性は非常に少ないです。ですが、こうした品質管理をきちんとやった上で、きちんとサイトも選んだ上で、そういうところに持っていったとしても、さらにひょっとするとさらに間違いがあるんじゃないかという、そういうご心配もまたあるんだろうと思います。それで先ほどちょっとお話したような安全評価では、わざわざ、本当は殆どそういう可能性というのはないと考えられるのだけれども、ひょっとして人間がミスをしているかもしれないというようなシナリオも、一応組み込んで評価を行っている。何重にもそういう形で、今おっしゃった重要な点については対応がされているということなんだろうと思います。

溝越） はい、ありがとうございました。それから有松さんからのご質問は、自分もタクシー会社を経営しているから、原油高騰の影響とか環境へのコストなんかを考えると、原子力発電が必要だというのは理解出来るけれども、原子力発電への依存はいつまで続くのか。そのあたりを知りたいというご質問がありました。それともう一つ、現在安全といわれている事が将来にわたっても本当に安全なんでしょうかというご質問です。それともう一つ、専門家の方たちに絶対安全というのは難しいかもしれないけれども、安全に対する物差しがないので、できればそのあたりを、安全性についてきちんと断言してほしいというご注文もありました。そのあたりはどなたがいいですかね。前半のほう、吉野さんお願いします。

吉野） それではまず原子力はいつまでお付き合いをしていかなければならないのかというあたりについてお答えをしたいと思います。まず原子力発電のメリットというところは、一つにはコストが非常に安い。それから安定した電源であるということ。さらには CO2 が操業からはほとんどまったく出てこない。こうしたところが挙げられるんだろうと思います。原子力発電というのは原子炉の中に束にした燃料を入れるわけですけれども、一旦入れた燃料は 4 年くらい燃え続けるわけであります。最近は 5 年近くになっているかと思います。そういうことで、一旦入れた燃料がずっと燃え続けるということで、足元のこまごましたエネルギー価格の変動という事に余り影響をされないという面があります。

それからコストという事に関しては、1 kwh あたり、ある条件をおいてですけれども 6 円を切るような値でありまして、これはその次に安い石炭火力と比べても同じ条件で 30 銭程度は安いということであります。よく原子力発電の場合には、後から出てくるまさにこの廃棄物の問題だとか、これらのコストが膨大になるので、そういうものを加味すればさらに高くなるんじゃないかというご疑問がありますけれども、今申し上げたコストというのはそれらのものをすべて、この廃棄物の部分だけではなくて、原子力発電所の廃止処置だとかいうものすべてを含めてのコストという事で、それでも十分他のものよりも安いという点でございます。

それから CO2 に関していいますと、1 kwh あたりでどれだけの CO2 が出るかという事に関して、火力発電所は 975 グラム出ると。原子力発電所は操業そのものからは出ませんけれども、そのものを作るのに、設備投資をするのに自ずと資材を使いますので、それによって 22 グラム出るという事で、大体 50 分の 1 くらいの CO2 の排出量に収まるということであります。こうしたメリットがある電源であるわけですけれども、様々ご心配をいただく向きがありまして、できるかぎり他の新エネルギーに頼る、ないしは省エネルギーを進めるべきだと。

こういうお話があるわけでありますが、こうした点に関して私ども資源エネルギー庁のほうで、ある機関を使いまして、今後 100 年くらいのエネルギーの需給見通しというものを試算をしているわけであります。この中で省エネを思い切り頑張ってやりまして、今の GDP あたりの消費量を 3 分の 1 くらいに収めるとか、今の太陽光、風力といった新エネルギーを現在の 180 倍くらいまで拡大をしていくということをしましても、自ずと先々電力の消費というのは増えていきますので、やはり原子力は今とほぼ同じくらいの比率を維持していかないと、まっとうなエネルギー供給ができないということであります。その先 2100 年以降はどうなるのかという事は、データとしては申し上げられないわけですけれども、少なくともここの会場にお集まりの方々が生きている間は、今と同じ程度の原子力に依存をしていかなければならないという事であります。

これに対して今日の主題でありますこの電気のゴミをどうするのかという点ですが、これもその処分をするのに技術の基盤が確立できていないという中では語れないわけでありますけれども、これまでの研究の成果をもって十分に処分を安全に行う事ができるといったところが確認をされておりますので、さすればその処分を確実に進めていくことを前提に原子力に引き続き依存していくというのは、これは政府としても、また国民の目から見てもエネルギー将来の需給を考えるうえで、合理的な判断ではないかというふうに考えております。続きはちょっと。

溝越）　はい。地層処分の安全性について、絶対に安全だと専門家の方に太鼓判を押してほしいということですけれども、そのあたりはどちら。出光さんにお願いします。

出光）　絶対安全といえといわれると、科学者としていうと絶対とはいえないんですね。だから 99.9999 パーセント安全だと思っても、最後の 0.0001 の可能性があると絶対といえ

ないというところは科学者の悲しいところで、感覚的には安全なんだけれども、なかなか絶対とはいえないという苦しさはあります。ただレベルの比較はできると思うんです。高レベルのガラス固化体で地層処分して埋めているという段階で、それで我々が被爆する可能性というのは、もう殆ど限りなく皆無に近いというふうに思っています。逆にどうやって被爆できるかということを考えるほうが難しいと思います。

深さ千メートルのところに、数百メートルのところに埋められているものを、そこにどうやって到達できるか。テロリストじゃないですけど、途中にいろいろ操業しているところをくぐり抜けていって、ガラス固化体のところにいって被爆をしようと思っている人がいたとして、被爆できないですね。すでにオーバーパックで包まれているとそこにいっても、もう先ほどと違って数十秒で死ぬような放射線は遮蔽されていますから、その段階ではそういう被害は出ない状態になっているわけですね。貯蔵しているところも非常にがっしりとしたコンクリートの容器の中に入っていますから、そこで放射線で被爆しようというのはまず無理です。

今度は処分された後に埋め戻されるわけですね。そこから放射性物質が出てきてそれを飲むんじゃないかということですけども、先ほどビデオにもありましたけど、地下水というのは非常に遅いんですね。先ほどのビデオでいきますと、1 年間で何ミリしか動かない。そのくらい本当に時間が止まっているようなところなわけですね。そこでなおかつ最初の千年間くらいは外側の金属容器のオーバーパックで絶対漏れないようにする。これは絶対といっていますけれども、先ほど 20 センチ近くの厚さがあって、千年間で 40 ミリ、4 センチ腐食するという設計になっていますけれども、実際は先ほどスライドでお見せしましたけれども、割と浅いところの粘土の中に埋まっている鉄器が表面が 2、3 ミリ腐食する程度で、全然なんともなかったわけですね。あそこは上では神社が火事になったりとかいろんな事がおきているわけですけども、地面の中、高々1 メートルくらいのところに埋まっているものがまったく何もなかったわけですね。それが数百メートルから千メートルのところに埋められて、もう外から何かしようと思ってもできない。そういうところに埋められている。粘土で覆うと、先ほどのウラン鉱床の話もありましたが、粘土で埋められているとその中はもう殆ど物が動けなくなる。ここまでやられていると、その中から放射性物質が出てきて、それを飲んで被爆するためには一体どれだけ出てこなきゃいけないか。どれだけ水を流さなきゃいけないかという事になってしまって、感覚的には被爆できないというふうに思っています。

溝越） はい、ありがとうございました。今出光さんからもお話がありましたけれども、放射性廃棄物の処理で絶対に安全と断言する事はできないけれども、99.99 パーセント、極めて高い確率で安全性ができる。よくいわれるように、幾重もの安全対策というのを施すと、一つか二つミスがあっても安全装置が働いていく。そういう多重防護システムというものをとっていく事で、安全性はより増していくと思います。危険性を限りなくゼロに近づけるという事は可能だろうと思います。放射性物質で一番皆さん関心が高い安全性の問

題なんですけれども、できるだけ危険性を限りなくゼロに近づける事は、物理的に今の科学技術の力で可能だという事だと思います。

次に地層処分についての広く国民の理解を得るにはどうすればいいのかというテーマについて、少し議論を進めたいと思います。地層処分をめぐる先ほど広報とかPR体制のお話がありましたけれども、そのあたり十分なのかどうか、林田さんのほうからお願いします。

林田） はい。地層処分というものは見えないところで、物事が進んでいくわけです。今先生方からは、声をそろえて安全安全安全と説明されました。聞いていたら、ああそうだろうねと思います。しかしあんまり安全といわれると、一抹の不安が漂います。それから地域との共生という方法のなかで、メリットがあります、その地域にとてもメリットがあるといわれると、なんだか地上ではメリットがあるけれど、地下にデメリットを抱える事になるんじゃなかろうか、そのようななんとも言えない不安が感じられるわけです。

ですからよいことも悪いことも、メリットもデメリットも、すべて研究の成果をそのまま報告していただく事によって、それを市民が共有のものと受け止めて、どう対処していくかということでしょう。だから一般市民も共通の認識をもつまでの広報活動というのがこれからはとても大事な事だと思います。

安全と言われていても、今日福岡の皆様いらっしゃっていると思いますが、安全と思っていた福岡に地震がありました。博多には地震はないと信じて暮らしていたわけです。うちの夫が地質調査技師なんですが、揺れたすぐあと、子供たちはみんな、「お父さん、博多には地震はないといいよったろうが」と責め続けました。大丈夫と言われていたところにも地震が起こったりするわけです。そういう意味では日本の地図を見ながら活断層はここにあるんだ、火山はこうだといわれても、果たしてそれが変わることはないだろうかと思うわけです。先程は大丈夫だというお話をいただいたんですが、その辺のところも今こういう結果が出ました、今こんなふうになっています、と現在進行形で情報を公開してくださる、伝えてくださる、これが一番大事なことではないでしょうか。ですから地域に対してもメリットだけではなくて、デメリットの可能性をも是非伝えていただきたい。もっと知りたいと思います。地層処分という言葉を知っていますかと、と質問したときに何人の方が知っているでしょうか。もっとこの言葉を分かりやすく市民に伝える努力というのがいると思います。

溝越） はい、ありがとうございました。続いて野口さんお願いします。

野口） はい。今本当に地層処分という言葉をとおっしゃったんですが、私も地層処分のことを知ったのは5、6年前くらいなんですね。そんなに日は長くなくて、その時に初めてこういう取り組みをやっているよということを知ったんです。ちょうどその同じ頃に玄海原子力発電所を見学に行きました。今現在はアメリカのテロ以降、原子力発電所の見学はもう外の建物しか見れないんですけれども、その当時は中に入っていろいろ制御室だとか、中の仕組みだとかいうのを見せていただいたんです。その時に一番印象に残ったのは、使用済み燃料がプールの中に沈められている光景だったんですね。本当に水の中にその燃

料が熱を冷ますというか、それで沈められているのを見て、あっ、これが使用済みの燃料なんだということが、初めて目の当たりにして分かったわけです。

先ほど林田さんがおっしゃったように、家庭のゴミというのはもう出るからわかるわけですよね。量が多いと減らそうとか、これは紙だからリサイクルに回そうとか思うんですけれども、電気については毎月電気の使用量を見たときに、今月は高いとか低いとかいうところは分かったとしても、一体どれくらい燃料が使われているのかとか、どういうふうに処分しないといけないものが出ているかというのは認識できないわけですね。だからあの時にすごく見学にいってよかったなと思ったのは、その使用済みの燃料がこんなにありますよというのを見れた事がよかったというとおかしいかもしれませんが、あっ、こういうふうに出ているんだから、このことをやっぱり自分たちがどうするかということを考えないといけないんだなと、本当に百聞は一見にしかずというか、まさにそうだなと思いました。

そういう意味では、いま現在は原子力発電所の見学は難しいかと思いますが、やっぱり何の製品でもそうですよね。資源を取ってきて、使って、使ったあとのことも考えましょうという世の中になっていることを考えれば、原子力のこともかなり考えるためには、使ってその後のこと、どうなっているのかなというところをもう少し知るというか、その情報提供という意味ではもちろん電力会社ということもあるでしょうけれども、国のほうでももう少し大々的にといいますか、何か情報提供するということを、分かりやすく伝えるという事がもう少し必要なのではないかなと思っております。

溝越）　はい。有松さん何か、広報、PR 体制に対してのご注文はありますか。

有松）　はい。広報の話の前に先ほどのご説明を聞いて、タクシーに乗るよりはもしかしてこっちのほうが安全なのかなと一瞬思ったりしたんですけども、タクシーのほうが事故にあう可能性が高いかなとかですね。いろいろ反省しきりでございました。広報に関しては、今国のほうからというお話もありまして、今日一番びっくりしたのは入り口に入ってくるときに、あの色とりどりのこんな分厚い本が山のようにありまして、これだけ広報をしているのに、実は私がこの地層処分の話は半年くらい前に始めて耳にしまして、耳にしたのはこの地層処分というのはあるよと。こんなことだよという大雑把な内容でした。

今日のような詳しい説明を私が知ったのはこの一ヶ月くらいの中の話でございます。そういった意味ではあれだけたくさんのパンフレットがあって、でも伝わってこないものがあるのかなという気が、実は実感として改めて今日感じております。そういった意味では他にもいろんなものが今私たちの生活の中にはあって、実は我が事なのにどこか他人のような気がしている問題というのは、恐らくたくさんあるんだろうと。どこかで行政任せであったり、国任せにしている部分というのが一番大きな問題なのかなという気がしております。そういった意味では私たち青年会議所もそうなんでしょうし、恐らく各地域の中ではそれぞれ地域のことを考える団体や、組織がいろいろとあると思うんですね。

普段当たり前に電気を使っているんであれば、そこから出てくるゴミをどうするかとい

うのは、実は本当は他人事にしちゃいけないんだろうと。そんな組織のなかで議論をできるようなそういう情報の提供の仕方というのが、これから望まれているんではないかなという気がしております。もちろんそれこそが一番難しいんだろうと思いますけれども、こういった機会で、私もこのような形でステージ上に上がらせていただくことを通じて、少なくとも青年会議所のなかで、この九州のなかで是非こういう話をいろいろしていかなければなということを、今日改めて決意を新たにしておりますし、是非いろんな機会を提供して、いろんな方を巻き込んでいく。特にフェイスツーフェイス、また人の声が聞こえる、顔が見える中での議論というのを、是非今後取組みとして、ああいうパンフレットもいいんですが、そういった部分もいかがでしょうかということをご提案をさせていただきたいと思います。

溝越）　はい。ありがとうございました。今お三方から広報というか情報公開のあり方についてご質問がありましたけれども、まず林田さんからは去年も福岡沖地震があった時に、殆ど大丈夫といわれていたところに地震がおきてきたと。原子力は安全安全というけれども、いい情報だけではなくて、デメリットの情報もきちんと伝えて欲しいと。そういったほうがきちんと安心感を高められるんじゃないかというご質問だったと思います。これについては清野さんにお願いしましょうかね。どういう形での情報がいいのか、よろしくお願いします。

清野）　はい。林田さんが言われましたことと、後に野口さんが言われたこと。あるいは共通したところもございますが、一言でいいますとまさしくそのとおりでございまして、いわゆるいい情報だけを出していくということでは、いけないわけでございます。少し難しい表現になりますが、リスク・コミュニケーションと我々は称しておりますが、簡単にいいますとそのリスク、危険も、あるいは組織側にとって不都合なことも全部出して、その危険については組織としてどういう対応をとっているかということを、とにかく丁寧にご説明する。正直言いまして一回二回では理解ができない部分があろうかと思います。しかしそれを丹念に噛み砕いて、とにかく分かっていただけるまでとことん話していく。もっとコミュニケーションで大事な言葉のなかにアクティブリスニングという言葉もあるんですが、要するに積極的に聞くということを、その方が何に疑問を持ち不安をお持ちかということをまず十分に把握し、それに対して正しい事実というか、事実をとにかく出しまして、それを丁寧に丁寧にご説明する。そこに誠意というか誠実というか、それは当然とことん誠意誠実を持って回答していくということを繰り返していく。私はそれ以外に近道はないんだろうというふうに思っております。ややもすると自分の嫌な部分とかそういうものを出したがらない事になります。原子力に少なくとも携わる我々としてはそれは絶対にそういう考えになってはいけないというふうに思います。

溝越）　はい、ありがとうございました。野口さんからは百聞は一見にしかずといいますか、玄海の原子力発電所を見学したときに使用済み核燃料がちゃんとプールに貯蔵されているのを見て、そういった仕組みといいますか、いろんな原発のゴミがこういう形で貯

蔵されているという事が分かったということで、そういういろんな形で施設を見たりするようなシステムといいますか、そういう形が出てくると、いろんな理解が深まるんじゃないでしょうかということ。もう一つは国としてもそういったエネルギー教育といいますか、そういったものもきちんとやっていただけるほうがいいんじゃないですかというご意見がありました。この点については吉野さんから。

吉野）　はい。百聞は一見にしかず、現場を見ていただくというのは非常に大事な点かと思っております。私も毎回出てきます六ヶ所の高レベル廃棄物の貯蔵施設、あのコンクリートの上に二度ばかり立った事がありますけれども、何のこともないわけで、実際に自分が経験をすると、大いに安心ができるという点がございます。一方でご指摘があったように、テロ等に対する対応という事で、施設をご覧いただくという事に関して制限もかかってくるところもありまして、今後そこはいろんな工夫がいるんだろうと思っております。

よく海外を訪問をされました国会議員の方々がいわれるんですが、日本は本当に見せ方が下手だとおっしゃられる。海外に行くと実物大のさまざまな展示物だとか、それを説明する方も本当の研究者の方々が直接ご説明をされる、自信に満ち溢れておられる。それに比べると日本はなかなかそういうところが到っていないんじゃないかということをよく言われます。こういうところに関しては、原子力広報、さまざまご議論があるところですが、参考にできるところは大いに参考にしながら、是非進めていきたいと思っております。また他方でこの分野の難しいところは、どうしてもこの分野は事故ですとかネガティブな情報は比較的皆さんのお耳に、耳が立つところがありますので、すっと耳に入っていきやすい。ところが少しご紹介したような海外の原子力の動き、アメリカも原子力発電所の再開を始めた、イギリスも舵を切った。こういう前向きな動きというのは中々皆さんの耳に達していないところがあります。

人間の場合、私如きがいうのは何なんですが、自分の関心のある問題についてはどんどんと知ろうとする。ところが関心のないもの、何か嫌なものに関しては聞いていただけないと。知りたがらないというところがあって、そういう方々のところの口をあけて食え飲めとこうやってもなかなか難しいところがあるので、非常に地道な広報、先ほど清野理事がおっしゃったような、よく物事をお伺いして、それに答えるような方法をしっかりやっていかなければならないというふうに思っております。

また一方ベースとしてのエネルギー教育というもの、これは非常に大事ではないかと思っております。先頃私どものほうで広報の関係の研究会を一年余りやってきたんですが、そのなかで学校の教科書がテーマになりました。この中でエネルギー環境教育をするときに、風力、太陽光、こういう事が進んでいる。それから省エネルギーとしてもこういう事がなされている。

ところが原子力の分野に関しては、教科書のなかに載っている情報というのは、チェルノブイリの事故の写真だけのっかっていると。さまざま編集の方針はあるんだろうと思うんですが、どうしても原子力に関しては、私どものほうから申し上げるのも何なんですけ

れども、マイナスのバイアスがかかった情報が提示されがちなところがございます。そういう意味で、それは学習指導要領の話なのか、先生方にお願いする話なのか、そこはこのあとさらに検討していかなければなりませんけれども、幅広い、国民の生活にとって大事な問題ですので、ファクトをしっかりお伝えをしていく。必要な情報は分かりやすくお伝えしていくということを、教育の分野でもやっていかなければならないというふうに思っております。

溝越）　はい、ありがとうございました。それから有松さんからは、先ほど私も入り口で手にしたんですけれども、こういった原子力 2005 とか、いろんな形の原子力の広報資料をたくさん用意してあるのに、余り日頃手にする事がないというか、一生懸命国と NUMO さんあたりが資料を出されて、PR に務めているのに、なかなかそれが普通の人たちに浸透してないんじゃないかというご指摘がありました。そのあたりどのような形でこれから先工夫されようとしているのか。そのあたりは清野さんお願いできますか。

吉野）　ちょっと私のほうから一言。先ほど有松さんご自身もおっしゃっておられましたけれども、私どもの国が申し上げること、ないしは NUMO、原子力機構の方々が申し上げることをお聞きいただくということも、それはそれでできるだけ機会を多くしてしてという事が大事だと思っておりますけれども、先ほど申し上げました同じ広報でどういうことをやっていったらいいのかという研究会をするなかで、地域のなかでエネルギーのことを語っていただく、格好いい言葉かどうか、コミュニケーターというものをできるだけ我々も互選をしながら、なっていただくという事が大事なんだろうなということを痛感しております。

私はこちらに参る道々「坂の上の雲」の小説を何度も読み返しているんですが、面白いくだりがありまして、日露戦争間際に戦費を調達するのに渋沢栄一さんのところに児玉中将が出向くわけですが、何のこともなくこんな厳しい財政事情で戦費を出せるものかと断わられたと。ところが児玉中将が一計を案じて、渋沢さんに非常に親しい経済界の方を現地の満州だとか朝鮮に派遣をして、その地域にロシアがどれだけ進出をしてきているのかという状況をつぶさに見ていただいて、その見てきていただいたものをその本人が渋沢さんに語って、渋沢さんはそれは大変だと。これはお金を出さないといかんということで納得していただいたという事がありました。ですから本当にその地域の方々の中で信頼をおかれている、またその目線で話を語る事ができる、こういう方々によってエネルギーのこと、それから原子力のことも語っていただくことは非常に大事なんじゃないかと思っております。そういう方々を探しながら、きちっとした情報をその方々には提供しながら、その上でまた幅広くご理解をいただくような流れができてくるのがいいんじゃないかなというふうに思っております。

清野）　ちょっとよろしいですか。大変失礼いたしました。まさしくそういう部分はございますけれども、私の結論からいいますと、一番大事なのは双方向の対話が一番大事だと。どうしてもパンフレット、その他というのは一方通行でございます。どちらかという

と制作者側の意図だけで書いているというきらいがございます。これは当然でありますが、どうしても自分たちが知らせたいものだけを書いてあるわけです。これを是正する、あるいは理解を深めるという観点で考えますと、もう言葉よりも、やっぱり先ほどからいっていますように、何を不安視し危険視しているのかということをつぶさに積極的によく聞くという、双方向の対話という事がキーワードであり、今後パンフレットは必要でありますが、やはりそこに力点を置いた人と人の会話というものを大切にして理解を促進していくという事が大事ではないかと思います。大変失礼しました。

溝越）　はい、ありがとうございました。私たちも新聞記者ですので、あちこちに取材にいったりする事があるんですけれども、やはり広報のあり方というのは一方的な PR だけではなかなか理解が得られないじゃないかなと。つい最近も皆さんご存知のようにパロマ製のガス瞬間湯沸し器の事故が多発して大きな問題となりました。当初会社のほうはこれは不正改造が原因だと言い張って、責任はないよという話をしていたんですけれども、数日後には機器の老朽化で安全装置が作動せずに中毒事故が起こっているという事が分かって、急遽また会見して平謝りしたんですけれども、一度そういうことをやるとなってくると、なかなか信用回復ができない。だから今パロマに対する信頼というのは相当落ちているんじゃないかなと。

これと同じように、不都合なことを、自分のところに都合の悪いことを、デメリットのことなんかもすべて最初からさらけ出して市民の理解を得るという事が、信頼を得る近道だろうと思います。先ほど清野理事からもお話がありましたけれども、つまり一方的に説得とか上から説明するんじゃなくて、双方向で理解を得る努力をするという事がこれからの広報のあり方だろうと思います。もう一点、最終処分地の今度は選定プロセスについての意見をお伺いしたいと思うんですけれども、最終処分地を今から選定するのはなかなか難しい問題がたくさんあると思いますけれども、これはどうしたらいいのか、そのあたり林田さんのほうからお願いできますか。

林田）　はい。お話を伺いながら、考えておりました。私たち説得されて動くのは後味が悪いんですよね。やっぱり納得して動きたいと思います。平成 40 年後半にはスタートという数字を見たときに、多分焦りがあるのではないかと思いました。どこかに動きがある、、、という期待があって。しかしなかなか手が挙らない。じっと待っていらっしても難しい。いくら説得に向かわれてもこれが難しいのではと思います。

そこで私は先程出光先生が、健康診断好き、レントゲン好きとおっしゃったんですが、いっそのこと、日本地図を見て診断して候補地を絞ったらどうだろうと思ったのです、私共素人でもあの日本地図を見たときに、ここならいいんじゃないかなどと思うわけですね。ここときこはなどと勝手に候補地を探したりしなくなってしまいます。逆に町を診断してくださるというのはどうでしょうか。例えばこの町はとってもいい町なんですよ。それに適した場所なんですよという風に適地として公表するわけです。推進していらっしゃるほうからいくつか候補地を選んで、調査を行い、地層の健康診断をして、本当によいところ

を選んで、その中から進めていくのはどうだろうかと考えました。メリットありますよ、どこかやりませんかといわれても、オリンピックには手を挙げるんだけども、地層処分には手を挙げたくないわけです。それはつまり負の遺産を背負うのではなかろうかという次の世代に対する後ろめたさのようなものが私たちの心の中に残るわけです。だから地域のメリットじゃなくて、本当にこの私たちの国で解決しなければならないのです。ですから、この国の中であなたの町はすばらしくいい町なんですよと、つまり地層処分をするに適した環境をもっているということをアピールするわけです。そういうお墨付きを与えて進めていくという方法もあるのではないかという気がいたしました。

つまり、あなた元気よといわれたら、私たちすごく嬉しいですよね。いいんだよといわれた町のなかから住民の意見を反映しつつ動いていくというのも近道じゃないかなと、この頃考えておりました。

溝越）　はい。野口さんいかがですか。

野口）　なかなか処分地の立候補に手が挙がらないということですけど、やっぱりまだまだその必要性というのが十分浸透していないというところはあると思うんです。本当に作るとしたらどうなるんだろうというところもあると思いますので、先ほどリスク・コミュニケーションだとか、直接会って双方向で聞くだとかとおっしゃったみたいに、まずはこういうふうに皆に知っていただくという大きな会場での話も必要だと思うんですけれども、ちょっとでも関心を持ってくださったところがあったら、もうすでにされているとは思うんですが、やっぱり直接話をするというところが大事だろうなと思います。

こちらからいうというのも一つの手かもしれませんけれども、割といいですよといったら、その近隣の人たちは逆になんで隣りはよくてうちは駄目なんだろうとかいうようなところもまた出てくるのかなという気もして、本当に手を挙げるということは難しいところなのかもしれないですけれども、これはもう少し全国的にもといったらおかしいんですけれども、全国的なニュースでも余り、こういう処分地の立候補がというところで、もうそろそろ迫っているんですよというような捉え方をした報道というのはそんなにされてないと思うんですよね。むしろ広報で手を挙げそうなところがここがありましたよみたいな、ちょっとマイナス方向の報道しかないんじゃないかなと思いますので、そういう意味ではもう少し国として真剣に考えていくべきなんだよというところでは、大きなニュースだとか特集だというか、そういうところで捉えて、バンと詳しく説明していただくということも一つの手なのではないかなと思います。

例えば福岡の場合だと、炭鉱があったところなどは、炭鉱が閉山してしまうとそのまま人口も減るし会社もなくなるしというところがあったわけですが、これについては、本当に人が関わって安全性に配慮してというか、ずっと見守っていかないといけないわけですけれども、長期的な視野にたった施策というか、地域の発展が見込めるということであれば、やっぱり地域のことを考えた街づくりの要素も大きいかと思います。

もう少し地域自体で理解を深めて進んでいくと、それが科学的に勉強する地域になるというか、そこが推進される地域になるというか、そういったところにも繋がっていくのではないかなと思います。

司会） はい。じゃあ有松さんお願いします。

有松） 最終的に誘致しようかしまいかというような段階の入口のところでそうだと思うのですけど、いずれにしても 100 対 0 というような、皆でやりましょうというようなことは当然起こるわけはないのですが、それを是非検討をという事になったときに、事が事だけに、今のこの時代で多少核アレルギーといいますか、原子力アレルギーを持つ日本人として、その地域でこのことについて考えようとするときに、かなり強烈なリーダーが求められるのだろうなと思います。もちろんカリスマとかそんなものではなくて、例えばその地域の方の声をよく聞く人であったりとか、本当に確かな情報を、正しいとか間違いとかいうのではなくて、確かなことをしっかりとお伝えをしていけるような人だとか、そういったリーダーが本当に恐らく必要になるのだろうと思います。

そういった中で、実は青年会議所の中では昨年からローカルマニフェスト運動という事でやっております。これは地方の首長選挙戦あたりで、マニフェストを出してもらうという事は非常に流行っているというと語弊がありますが、そういったものを実はご提出いただいて、この町をこの地域をどうして行くんですか、そんなことを次のリーダーの方々にお伺いをし、そしてまた実際にその首長さんになられたあとは、その結果についてしっかりと検証をしていこうという運動をやっております。その中で私たちはエネルギーという視点を今まで考えてなかったんです。この地域のエネルギーをどうまかなっていくんですか。それをあなたはこの地域のリーダーとしてどのようにお考えですか。そんなことも聞いていかないとまずいのかと思います。

特に災害なんかがあったときに、このエネルギーをどこからどうもらっているかという事を住民が知らない。実は隣の県から隣の市町村からエネルギーをもらっていながら、いざ災害があると、自分の地域に電気がないということを初めて知ってしまう。こういう事は非常に不幸な事だと思いますし、こういったところを入口にして、エネルギーというのがどのように自分たちの地域に関わっているのか、そしてそのエネルギーの行きつく先、いわば最後のゴミの部分、そういったところまで議論をしっかりと膨らませていけるような、そんなリーダーを今後我々は考えていかなければいけないのだろう。そのためにもこのマニフェスト運動をもう少し、これはさらに切り口を深めてやっていかなければならないという事を今日は実は気がつかされていました。

これがひいてはその地域に住む私たち住民一人一人が自分達の地域を考える中で、自分達のエネルギーはどこからきていて、最終的にそれがどこにいっているのか。そんなことを気付かされるきっかけになっていけばと思います。いずれにしても、先ほども地域振興という事で出ていましたが、市町村合併ですとか地方の自治体がいろんな問題を抱えているというニュースはよく耳にするのですが、そんな中でこれも一つの選択肢なんだろうと

いうことについて、私もそれも今日知りまして、地方が今からいろんな形で生き残りをかけていく、うちは観光だ温泉だ、産業誘致だ企業誘致だ、非常にカッコイイ、私どももよく聞く地域振興もあるのですが、こういった本当に日本国民、日本人すべてに関わりのある地層処分の問題、こんな事を通じて、もし地域振興を図れるとすれば、それは大事な選択肢としてこれからそれぞれの地域が考えていかなければならないのではないかという事も今日考えました。以上です。

司会） ありがとうございました。いまお三人からご質問がありましたけれども、林田さんからは最終処分地の候補地を国のほうが手を挙げるところを待っているだけではなくて、むしろ市町村のほうも自分達の町で気軽にどういうところが適地なのかどうかという形で、健康診断を受けてみたらどうでしょうか、そういう逆な、市町村のほうから積極的にアプローチしてはいかがでしょうかというご意見がありました。この辺りの違った方法での公募の仕方はどうでしょうかということですが、この辺りは吉野さんいかがでしょうか。

吉野） 非常に重要なご指摘だと思っております。この NUMO の方で公募をされる、また法律上も何段階にもわたる手続きを定めるという事に関して、非常に長きにわたる議論があったという事でございます。諸外国におきましても、どちらのケースもございます。先ほどのフィンランドのケースは 370 幾つの地点を国、ポシバという会社でお調べになられて、最適だと思われるところに絞り込んでいかれた。こういう方法が出来れば非常にありがたいと思っております。

ただ逆のケースで、フランスの場合には、1980 年代の後半に最終処分場の場所を探そうとした時に、非常に強い反対運動にあいまして、15 年間とりあえず棚上げをする。その間に様々な研究開発を続けていくということをされたのですが、その中で、一つビュールという場所に地層処分の研究所を作るということを進められたのですが、この研究所を作るときには、フランスの全国のデパートメントから公募をするという形をとられました。フランスのケースでいえば、一旦処分地の選定の中で非常にこれは大変だと反対運動もあってと。次のステップとしてはまず幅広く理解を得る、関心を持っていただいた方々にうまく情報を提供していく形としては、その公募方式がいいんじゃないかということを選択された。

聞くところによると、20 幾つかの地点から応募を得て、その地点が決まったということを言っておられました。結果的にはかなりの地域で理解が進んで、今の研究所がある地域を中心に 2 つの県、デパートメント、それから 60 の市町村で概ねこういうものが受け入れられるというところまで理解が進んだという事です。この後その研究所を中心にした近傍のエリアに場所が決まっていくのではないか。これはフランスの方々は明言はされませんが、そういう見通しになっていくのではないかと思っております。日本の場合はどうかといいますと、この問題についてのセンシティビティがどうなのか、受け入れていただけるのかというところの国民の方々の感覚というのをまず意識しなければならないわけで、公募方式という事で関心を持っていただいた方々に、NUMO もどんどん地域に入られて勉強

会もされていますが、そういう形では比較的入っていきやすくなる。

他方でそういう方式ではなくて、まずあちこちを調べて国が決めますよということにすると、やはり今の日本の状況では警戒感をもたれるのではないかと思っております。ただ繰り返しになりますが、関心を持っていただいたところに対しては、単に公募だからといってお待ちしているだけではなくて、これは清野理事からのほうがいいんですが、地元に入られて個別にもフェイスツウフェイスでも説明をされているという事ですので、そういう事をしながら、出来る限り理解の広がりを得て、その中から応募が出てくるという事を期待するということです。

司会）　野口さんからは最終処分地の過程で、町づくりのノウハウとかソフトなんかも提供するような事をすれば、地域にとって資産になるという事で理解が深まるのではないでしょうかというご提案がありました。この点について清野さん、お願いできますか。

清野）　申し訳ありません。もう一度まとめていただけますか。

司会）　町づくりのノウハウとかソフトなんかを提供すれば理解が深まるのではないでしょうかという事なんですが。

清野）　はい。大変失礼しました。先ほどこれについては触れましたように、基本的には地域地元の方々が本当にどういう町づくりを考えていくかということを、それぞれ例えば本日ご参加のパネリストとしてご参加の方々はそれぞれのオピニオンでございまして、それぞれのお考えがあるわけであります。私どももその地域のそういう関係の方々にお会いし話をしている過程で、本当に感動するほど将来について考えておられるわけであります。私どものほうから当然ながら先ほど言いましたように、そのモデルプランというものを考えて、専門家にも検討をしていただき、そういうものを作っておりますが、なお重要な事はやっぱり今言いましたように、JC の方とかボランティアの方とかそういう方々が本当にその土地、地域に根ざした判断に基づく将来どうあるべきかということをベースにものを考えていかなければならない。我々のほうからの提示というのはあくまでも参考でございまして、それを地元の考え方と刷り合わせをし、本当に真に地元が望むという方向に我々がどう貢献できるかという事を考えていくべきだと考えております。

司会）　はい、ありがとうございました。それから有松さんからは、有松さんが取り組んでいる JC がローカルマニフェスト運動というのを進めていまして、これに各首長選挙に立候補する人たちにマニフェストを作ってもらおう。その中に是非エネルギー、原子力の問題に対する姿勢を書き込んでもらうということで、最終処分地の問題についても少し関心を高めていくようにしたらどうですかというご提案だろうと思いますが、この点については吉野さんから何かありますか。

吉野）　ありがとうございます。まずエネルギーの問題さらには原子力の問題に関して言える事は、この電気にしてもなんにしても、このエネルギーの問題というのは国民の家庭でスイッチをひねるような身近なものであるにもかかわらず、その政策だとか問題だとかという事に関しては余り関心を持っていただきにくい問題だと思っております。

同じようなシンポジウムを東京でやったときに、あるパネリストの方がおっしゃっておられましたが、その方は新潟の方なんですが、豪雪の時に停電をして大変苦労した。ああいう事が起こって初めて電気のありがたさが、原子力の立地地域である新潟の方々すら初めて改めて認識をした。その方は舞台裏でやや激しい事を言っておられたのですが、かつて原子力の問題があったときに、停電するかしないか首都圏でというのがありましたが、一度経験をしてみれば本当にありがたみが分ったんじゃないかというところまでおっしゃっておられました。

ところが申し上げたように、中々通常は国の政策として個々の生活に関わる問題としてはご認識をいただけないというところがこの政策の宿命なようなところがあります。またその原子力に関して言えば、発電所然り、今回の処分場然り、立地という事で、その地域の方々と深く関わっていかなければならない問題でございます。そういう意味で、この国策であるエネルギーの戦略とそれから地域の問題とをいかに結び付けていくのかというところに関しては、ご提案があったような政治レベル、上のレベルから末端のレベルまであるのでしょうけど、様々なレベルでこの問題をお考えいただくという事は非常に大事なんだろうと思っております。

いま原子力の立地をいただいている地域の方々は、結果的にかもしれませんが、エネルギーに関して非常に高い意識を持っておられます。地域の振興策という事に関しても、エネルギーに関わる産業をもってその地域を振興していこうというプランがあちこちから出てくるという事がございます。そういう意味で、地域の振興という事とエネルギーの政策戦略を結び付けてお考えいただくような土壌を雰囲気を作っていくという事は、出来ればいろんな協力をさせていただきながら出来ればこれはありがたいと思っております。

司会)　はい、ありがとうございました。原子力発電所についてのシンポジウムとかプルサーマル発電についてシンポジウムというのは各地で行われてきましたけれども、こういった高レベル放射性廃棄物を巡っての公開シンポジウムというのはこれまで殆ど行われてきてなかったと思います。本格的なシンポジウムというのが九州で行われたのは今回が、恐らくこれが初めてではないかと思います。日本に初めて原子の火がともったというのは今からちょうど 49 年前で、1957 年 8 月 27 日です。そして商業用の原子力発電所として、日本原子力発電東海一号機というのですが、これが営業を開始したのがちょうど 40 年前の 1966 年 7 月 25 日です。その時からこの原発のゴミが、原子力発電所で核燃料を燃やしたら原発のゴミが出てくるという問題は分っていたわけなんです。非常に厄介な問題という事で、ずっと先送りにされてきました。しかし今日の議論でもお分かりになりますように、もう先送りできない状況にきているのだというのが実態です。今日のシンポジウムでは地層処分について多角的な議論がされてきましたけれども、まだまだ理解できない部分があるという人も少なくないと思います。これをきっかけに原発のゴミの問題について突っ込んで話し合う場が広がっていけば、このシンポジウムを開催した意義も半分達成されたのではないかと思います。そしてこうしたシンポジウムは一回だけではなくて、こういった

シンポを積み重ねる事で国民の理解というのも少しづつ深まっていくような気がします。本日は長時間にわたりご清聴ありがとうございました。これでシンポを終わらせていただきたいと思います。

【閉会】

司会)　ありがとうございました。それでは皆様、パネリスト、コーディネーターをどうぞ大きな拍手でお送り下さい。本日は本当にありがとうございました。

さて皆様、約三時間にわたって皆様と過ごしてまいりました「放射性廃棄物地層処分シンポジウム 2006　in 九州」、いかがでしたでしょうか。このシンポジウムが原子力発電及びそれにまつわる高レベル放射性廃棄物地層処分という問題を、皆様お一人お一人が自分達の問題として考えていただくきっかけになればと思っております。また本日のシンポジウムの内容は 8 月下旬の西日本新聞の朝刊にて掲載を予定しておりますので、是非ご覧下さい。またアンケート用紙は出口の回収箱または近くのスタッフにお渡しいただきますようお願いを申し上げます。

そして冒頭でもご紹介いたしましたが、インターネット上で地層処分についての議論を交わすリスク・コミュニケーションを開催中です。本日のシンポジウムを踏まえて、今度は WEB サイトにて活発な議論を期待しております。そしてロビーでは今回のシンポジウムの関連書籍を配布しておりますので、興味をお持ちの方は是非お立ち寄り下さい。

また本日放映しました映像は「未来レポート」、「吉村教授のとことんトーク」の一部でございます。興味のある方はお帰りの際ロビーにて NUMO にお申し込みいただきますと、後日無料でビデオをお送りいたします。そしてお帰りの際には当ホテル駐車場に展示しております高レベル放射性廃棄物地層処分模型展示車も是非ご覧いただきたいと思っております。

皆様長時間にわたりお付き合いいただきまして誠にありがとうございました。どうぞお忘れ物などございませんようにお気をつけてお帰り下さい。本日はご来場いただきまして誠にありがとうございました。